

畢淑敏とその作品の一側面（附作品リスト）

宮入いずみ

§ 畢淑敏について

畢淑敏（1952.10-）は16歳（1969年）の時、北京を遠く離れて軍隊に入り、平均海拔五千メートルを超える西藏の地でおよそ11年間軍隊生活を送った。その間に新疆区軍医大学で医学を学ぶ。その時代には選択の自由はなく、女性兵士は通信兵でなければ、衛生兵にしかならなかったという。その後1980年に北京へ戻った彼女は、ある工場の診療所で内科医となった（28歳の時主任）。文学への方向転換は父親からの勧めもあり、そのころ募集していた北京広播電視大学中文系の通信課程で勉強を始めたことがきっかけであったという（「為了雪山的莊嚴和父母的期望」）。また、魯迅文學院でも二年ほど学んでいる。二時間ほどかけて通いながら、午後には診療所へ出勤していたという（「背着菜包上學堂」）。

そして1987年、処女作「崑崙殤」を発表し、第四屆崑崙文学賞を受賞してからは、精力的に創作活動を続けている。北京師範大学で文学修士号を得ている。中国有色金属工業総会社に所属していたが、白衣を脱いで作家活動に専念している。本人は「書けなくなったらまた医者に戻る」と言う（「走出白衣」）が、現在、単行本も『畢淑敏文集』4冊のほか7冊出版されており、今後ますます創作活動が盛んになると思われる。

§ 作品について

ある作家の作品を論じようとするとき、その作品とほかの作品との間に何か共通項がないかと考える。作家によっては、全く別人が書いたのではないかと思われるような場合もある。しかし、よほど故意にそうしたのでなければ、その作家の作品傾向は自ずと見えてくる。ここで取り上げる畢淑敏もある傾向がみられる作家といつてよいだろう。

最初に読んだ畢淑敏の作品は、「女人之約」である。この作品は、その評論、子干著「《女人之約》的啓示」（『作品与争鳴』93-7掲載）でいうほど感動的なものではなかったが、経済改革が進み、個人の金儲けが当たり前のこととなった今日、お金ではなくて約束を守ることを求める主人公の姿が印象に残った。女性工場長と主人公の対立は、今までよいとされてきた生き方と違う生き方のぶつかりあいである。それは今の中国社会で、価値観そのものが大きく揺れ動いていることを表しているのかもしれない。そんな感想を持った。

また、ほかにいくつか読んだ作品からは、生真面目で、器用に世の中を渡るタイプでは

ない作者像が伝わってくる。努力家であることは、その経歴を見てもわかるだろう。

さて、畢淑敏の作品の場合、共通項はいくつか挙げられる。全作品を通読した訳ではないので、この共通項だけで作品を論じることが妥当でないのはもちろんである。畢淑敏の作品を読む手がかりのひとつにはなるだろう。

§三つの共通項

1. 軍隊にいた経験を盛り込んだ作品（たとえば「阿里」・「崑崙山」など）。
2. 医者を経験を盛り込んだ作品（たとえば「女人之約」・「生生不已」・「予約死亡」など）。
3. 親子を主人公とした作品（たとえば、「一厘米」・「捉刀」・「跳級」・「媽媽福爾摩斯」など）。

ここに挙げた作品の中では、1の軍隊生活という非日常的内容を扱ったものや2の病気・生と死・ホスピスの問題を扱ったものが、わりと話題になったようである。特に最近の「生生不已」は1994年人民文学出版社当代文学賞を受賞、「予約死亡」は『北京文学』で1994年1期から提唱された“新体験小説”の一つとして書かれ、北京市建国45周年優秀作品賞を受けている。

だが、医者を目で生と死を見つめて書かれる作者の視点は、非常に客観的である。あまりにも淡々とした描写は、作者を冷酷な人間ではないかと疑いたくなるほどである。たとえば「生生不已」は前半の子どもの病状変化を克明に描写するため、とてもグロテスクで、こんなことまで書いてしまってよいのだろうかと思われれる。

それまでの畢淑敏の作品と比べると異色の作品で、評論「人与上帝的对抗——读畢淑敏《生生不已》及其他」（雷達著『文学活着』人民文学出版社1995.8）では、「彼女はもはや作家ではなく医者である」とさえ言われている。結局、子どもは見るも無惨な姿に変わり果てたあげく亡くなる。さらに後半、母親は、もうひとり子どもを生む決心をする。しかし母親は、産まれてきた子どもに乳をやることもなく死亡してしまう。このストーリーの展開はあまりに重く救いがない。普通に暮らし、何の罪も犯していないのに、わが子が得体の知れない病魔にとりつかれるという不幸。それは誰にも起こり得ることではある。作者によれば、結末で母親が死亡する以外、実際にあったことに基づいているという。

…わたしはなにもかも人に同調して生命を描くことはできない。それを寓言のように一女性と生命についての寓言に改造しなくてはならなかった。だからその女性を死亡させて悲愴感を強化した。（「那是一則寓言」）

確かに、子供を失った母親が恐れることなく、もう一人子どもを我が手に抱こうとする母親の強さ、ひいては生命を絶えることなく継承しようとする人間の本能を感じさせる描き方ではある。しかし読後感がよいとはどうしても言えない。事細かな描写にストーリーが負けていると言ったら言い過ぎであろうか。

それに対して、3の親子を主人公とした作品は、短編で、ごく普通の親子の日常を素直な展開で描いていく。その親子の素朴な姿は、日本の読者にも共感を得やすいのではないか。ここではいくつかその短編を紹介しながら、作風の一つである親子像を見てみることにする。

§親子を描いた短編

1「媽媽福爾摩斯」

重点中学校へ通う息子也也は13歳。私（母親）は息子の帰宅に合わせてワントンを作っている。そこへ殴られて顔が腫れ、別人と見間違えそうな格好になった也也が帰ってくる。驚いた母親は息子から事情を聞いて、犯人探しを始める。しかし、殴られたとき一緒にいた維姫の家へ行っても、也也を殴った顔に傷のある背の高い子たちを知らなかった。也也の話から、彼らにやらせたのは周東ではないかと推理した私は周東を訪ねるが、うまく言い逃れられてしまう。也也の父親はヒステリックになる私をなだめて、ひとり周東に会いに行き、やらせた子の名を言えば学校に知らせないという取引して、実行犯の名前を聞き出してくる。そんな取引をすれば、つけあがらせるだけだと怒る私に、夫は「也也を連れて行って犯人の首実験をするような、残酷なことができるのか」となじる。それでも私は学校とボクシング教室に出かけて行って処分を求めた。

その後、也也を殴った二人の少年が謝罪にやってくる。はじめのうちこそ、しおらしくしているが、学校の処分を免じてもらえるよう頼み、さらにボクシング教室の方でも出国できなくなるので釈明して欲しいと言い出す。次第に話の主導権を握られ、私はここで事を荒立てて、也也にまた何かされるのではないかと心配する。結局要求をのむことになって、夫と同じようなことをしている自分に気がつくのだ。

子どもの喧嘩に親がしゃしゃり出るのはお門違いだ。しかし一人っ子となると、それではすまされない。ここに見られるのは、ひとり息子を持つ母親の典型的な反応といえよう。

2「捉刀」

息子、王永戦平は13歳。作文が苦手だ。父親は見かねて宿題の作文を口述して息子に書き取らせる。それが原因でクラス担任から呼び出される。王永戦平が本当のことを話した

という。よくないことをしたと思いながらも、若い女性教師に反発を感じる。父親の気持ちがかかるものか。重点中学への道は、小さい穴をくぐるようにとても厳しい。わが子の成績を上げてやりたいと思うのは親心なのだ。

その後、息子の作文は少しずつ上達し始めた。ところが受験も迫ったある日、再び呼び出されて行ってみると、若い教師は一転して模範の作文を10題ほど書いて、息子に覚え込ませるようにという。数カ月前に口述筆記をとがめた教師と同一人物かと疑いたくなる父親。さらに、「成功したお子さんの後ろには必ず父兄の方がついてるものなんです…」、「あなたは子ども自身が書いたように書くことができます…」とさえ言われる。父親は誇りに思っているのか、恥じるべきなのかわからなくなる。ともかく言われたとおりにしたところ、息子はめでたく重点中学に合格することができた。

これは中国の「お受験」だ。良い学校へ入れたいと思う気持ちが高じて、親が受験するかのような体制になる。日本の有名幼稚園・小学校受験と同じ状態である。第三者から見れば、おかしいと思える熱の入れようは、中国の方がもっとすさまじいかもしれない。それは次の作品「跳級」の母親の姿がよく表している。

3「跳級」

朱葉梅には小学校二年生のひとり息子、小約がいる。夫の李科は、ヒラの職員だ。大学の卒業証書がないために、未だ幹部になれないことが悔しくて仕方がない。朱葉梅は、幹部になどならなくてもいいのではないかと慰めるが、夫は納得しない。彼はちょうど学生の時、文化大革命が起こり、満足な勉強ができなかった。それは朱葉梅も同じである。その思いは、子どもの教育に向けられていく。

ある日、朱葉梅は小約の担任に呼び出される。担任は、小約を頭も良く、理解力もあり、反応も早くて記憶力も良いとほめる一方で、授業中の落ちつきのなさを指摘した。授業中ちゃんと聞いていない。新しい課に入っておとなしいのはわずか5分で、わかってしまうともう座ってられない、というのだった。そんな生徒への対応策となる、一つの方法“跳び級”と担任が言ったとたん、朱葉梅は小約が跳び級の受験をさせてもらえろと思ひこむ。そして知り合いから三年生用の教科書を借りてきて、朱葉梅は夫に息子を跳び級させると宣言する。夫は反対するが、朱葉梅は小約の意志を確かめようと提案する。小約は“跳び級”という言葉すら知らない。朱葉梅が「学校へ行くのがつらい？」と尋ねると、「つらい」と答えた。その指は、長時間鉛筆を握りしめて勉強していたために、かなり赤くなっていた。朱葉梅が、跳び級すればそのつらさが少なくなるというと、小約は躍り上

がって喜び、跳び級したいと言う。こうして夫の反対を押し切り、朱葉梅は小約の特訓を始める。

それはかなり厳しいものだった。二年生の宿題もやるほかに、三年の勉強をするのだ。普段は正月にしか食べない小約の好物を買ってきて、いくら食べてもいいと言って励ますが、小約はただただ眠くてそれどころではない。眠ったら永遠に目が覚めなければいいと思うほどだった。漢字が百回書いても覚えられない息子を、朱葉梅はとうとう木の棒で打ってしまう。小約は反抗する。朱葉梅は自分の手を激しく打ち、その傷を見せながら「あなたが今度間違えたら、お母さんは自分の手を打つから」と言って、小約に勉強を強いる。

夫はそんな残酷なことはやめろと言う。しかし朱葉梅は今跳び級することが、将来息子のためになる、そうしなければ息子は平凡なヒラの職員にしかねない、と言いかけて口をつぐむ。口では出世できない夫を慰めていたのに、彼女の本音は違う。やはり息子には少しでも良い地位についてもらいたいと考えているのだ。

試験にあたって、担任は小約にひとりで受験することを勧める。が、朱葉梅はあくまでも期末試験でほかの三年生と一緒に受けることを主張する。公正を期するためである。当日、朱葉梅は息子を学校の前まで送ってやる。試験が終わるのをそこで待っている間、息子に跳び級を強いたことが正しかったのかどうか、自問自答を始める。そして一つのこと気づく。「まさに自分の幼かったころの夢を、夫に対する失望を、今後の運命に対する掛け金を、ポロでも拾うように雑然と大きな籠に入れ、その籠を子どもの弱々しい肩に頭からかぶせたのだ…。」小約のためと言いながら、実は自分のためだったのである。それでも自己弁護をし、自分の行為を正当化しようとする。彼女のその姿は痛々しい。

子どもを持つ親でなければ、その気持ちはわからないと言われるかもしれない。だが、昨今の“お受験”は、何か間違っている。親の満足のためにどれだけ子どもが傷ついていることか。小約は試験の後、母親こう言う。「もし受からなかったら、もう絶対自分を打たないで、ぼくを打って。」

自分のために母親が傷つく姿を見るのはやりきれない。それは親がとる手段としてはもっとも卑怯だ。そのことに朱葉梅は気づいていないようだ。最後に試験は合格だったことを担任から告げられてこの小説は終わる。この後、この親子はどうするのか。またチャンスがあれば同じことをするのだろうか。作者はそんな問いかけをしているようだ。

4 「一厘米」

この作品は、子どもの身長が基準に一センチ足りているかいないか、母親が不正をした

のかしないのかをめぐって展開する。

知り合いから譲り受けた入場券を一枚持って、陶影は小也と出かける。子どもはまだ基準（一メートル十センチ）に満たないので入場券はいらないのだ。バスに乗るとき、子どもはもう大きくなったからと自分の乗車券を欲しがらる。基準に足りないので、車掌はいらないと言うが、母親は子どもの気持ちを考え、取替えて買ってやる。そして到着した寺の入り口で、逆に基準を超えているからもう一枚入場券が必要だと言われる。不正入場しようとしたのだと疑われるのである。しかし、今度はこの入場券を買うわけにはいかない。そんなことをすれば、自ら非を認めたことになるからだ。

入場をあきらめて、別の公園へ行ったが楽しい気分はぶち壊しになった。さらにアイスキャンデー屋の裏で、身長を測ってもらうと、なんと一メートル十一センチだというのだ。本当は背を測ると少し高めになるよう設定されているのだが。母親が嘘をついて、わざと入場券を買わなかったのだと思いこんだ小也は、母親不信に陥る。陶影はこの一部始終を書いて新聞社に投書した。陶影は毎日、新聞に自分の投書が載っていないか、ラジオから投書を読む声が流れてくるのではないかと期待して待っている。ついにある日、公園の管理所から担当者が調査にやってきた。そして実測して誤りは入場係にあることを認め、入場券が現金を渡すことで許して欲しいと言う。しかし陶影は受け取らず、「小也に母親は間違っていなかったと、説明してやって欲しい」と言うのだった。

これでこの作品は終わる。単純なストーリーだが、母親の子どもに対して正しくありたいという気持ちが良く表されている。

この作品は、最近日本で中国語の教科書、杉村博文編注『中国現代小説系列 一厘米一センチ』（東方書店1997.1.30）として出版された。その前書きで、二篇に注釈をするはずだったが、畢淑敏氏の要望により一篇を取りやめたとある。この取りやめた作品は、何だったのだろうか。そしてその理由は…。

§おわりに

畢淑敏の描く親子は、まじめで、こつこつと努力して一生懸命生きている。子どもを思う親の気持ちは、親子を描くどの作品からも強く感じられる。作者自身もひとり息子がいる身であることと無関係ではなかろう。ことに母親像には、作者が投影されている部分がある。ここでは紹介にとどまってしまったが、いずれほかの作家の描く親子像とも比較して検討してみたいと考えている。

毕淑敏作品リスト

☆『毕淑敏文集』全四冊に収められている作品の掲載誌、転載誌を載せ、その作品が『毕淑敏文集』以外の七冊の単行本に収められている場合は、備考欄に次に示す単行本の略号で示した。

女=『女人之约』 生=『生生不已』 毕=『毕淑敏作品精选』
 白=『白杨木鼻子』 预=『预约死亡』 性=『性别按钮』
 走=『走出白衣』

☆『毕淑敏文集』以外の七冊の単行本にのみ収められている作品は、単行本リストに入れ、掲載誌、転載誌を載せた。

☆掲載誌は現物で確認したもの他、特に散文についてはほとんど『毕淑敏作品精选』の記載による。また、『小说月报』巻末にある「报刊小说选目」によったものもある。

☆最後に雑誌にのみ掲載された作品を載せた。

◆文集

『毕淑敏文集 不宜重逢』

群众出版社 1996.8

所収作品	掲載誌	転載誌	備考
昆仑殇	昆仑87-4		生 毕
补天石	当代88-5		
阿里	解放军文艺93-8	小说月报93-11	女 生 毕 预
转	百花洲91-1		预
不宜重逢	莽原93-4		
伴随你建立功勋	时代文学91-3		
君子于役			
北飞北飞	中国作家91-4		

『毕淑敏文集 生命』

群众出版社 1996.8

所収作品	掲載誌	転載誌	備考
预约死亡	北京文学94-3		生 毕 预
生生不已	当代93-6		生 毕
教授的戒指	小说94-4	小说月报94-11	白
最后一支西地兰	海峡92-2		
看家护院	长城90-6	小说月报87-11	

所収作品	掲載誌	転载誌	備考
送你一条红地毯	昆仑87-5	小说月报87-11	女
原始股	青年文学93-5	作品与争鸣94-4	女
预约财富	北京文学95-1		预
紫花布幔	开拓88-?		女
『毕淑敏文集 翻浆』	群众出版社 1996.8		
所収作品	掲載誌	転载誌	備考
西红柿王	解放军文艺89-3		白
匣子里的水牛	北京文学90-12		
冰雪花卉	天津文学92-1		
阑尾刘	小说林91-6		白
翻浆	文论报95.3.1	小说月报95-6	毕 白
女人之约	青年文学92-8	小说月报92-11	
		作品与争鸣93-7	女 毕 白
赶考的女人	作品93-6		白
天衣无缝	山花94-9		白
不会变形的金刚	河北文学90-4		生 毕 白
一厘米	小说林91-6	小说月报92-3	生 毕 白
妈妈福尔摩斯	芳草92-1		白
跳级	河北文学92-7		白
束修	北京文学92-5		生
三赔	钟山95-3		
梦幻小屋和蓝手镯	北京文学90-12		白
苔藓绿西服			白
雉羽	新生界93-2		白
大海里翻了豆腐船			白
汗血马尾			
蟑螂谷			白
硕士今天答辩			
非正常包装			
白杨木鼻子			白
米字型电话键	长江92-1		白
月饼的故事			

所収作品	掲載誌	転載誌	備考
术者	山花96-7		
月晕而风			
同你现在一般大	东方少年94-1		毕白
给我一粒脱身丸			白
最晚的晚报			
猫头鹰行动	台湾联合报94.10.5		白
紫色人形			毕白
捉刀			白
悠长的铃声			
苹果核			
精品水			
走过来	北京文学94-11		
哈立克			
假如我出卷子			
斜视			

『毕淑敏文集 倾诉』

群众出版社1996.8

所収作品	掲載誌	転載誌	備考
第一辑			
文学的数学			走
铁马冰河入梦来			
写作是一种命运			性
我写《昆仑殇》			
别把你的秘密告诉我	小说月报92-11		
将心比心			
那是一则寓言			
戒指描述疼痛			走
与寂寞相伴			
炼蜜为丸	北京文学94-3		走
每一篇都从零开始			
亲自写作			
散文集《素面朝夭》后记			

所取作品	揭載誌	転載誌	備考
中篇小说集《生生不已》跋			
短篇小说集《白杨木鼻子》自序			白
《紫色人形》获奖感言			
《翻浆》获奖感言			
回答海浪			性 走
第二辑			
灯下红			走
没有墙壁的工作间			
录音电话			
内部招标			
今天我病啦			
一贺再贺	北京工人报95.3.7		毕 走
论文、小网和乡村记忆			
嫁给笔			
发的断想			
乡下的妹妹			
长寿眉			
那一天出门的时候			
陌生人的错误			走
女孩，请与我同行			性 走
强弱之家			
第三辑			
医生提笔	山西文学94-1		毕
白衣	散文百家94-5		毕
一个光滑的过程	散文百家94-5		毕
刀下留情	散文百家94-5		毕
药名			
药是一把斧			
你永不要说	北京日报94.1.17		毕 性
呵护心灵	光明日报94.12.31		毕 性 走
背着药包上学堂			
走出白衣			走

所収作品	掲載誌	転載誌	備考
第四辑			
为了雪山的庄严和父母的期望	作家95-1		毕 性 走
『性别按钮』『走出白衣』所収時、冒頭部分を削除して「从西部归来」と改題。 『毕淑敏作品精选』では「代自序 从西部归来」。			
昆仑之吃	四川文学92-8		毕
昆仑之喝	北京晚报94.3.29		毕
昆仑之眠	中华散文94-2		毕
十八岁的姐姐			
昆仑山那里出核桃	解放军文艺93-6		毕
花圈			
信使	三月风91-3		毕
穿上白生生的羊绒衣	人民日报94.2.28		毕
葵花之最	西南军事文学90-2		毕
昆仑山上看电影			
猜猜那个人是谁？			
第五辑			
婚姻鞋	北京日报93.3.15		毕 走
素面朝天	北京日报92.6.19		毕 走
寻觅优秀的女人	北京日报95.1.23		毕
中性			毕
男人和女人的区别	追求94-3		毕
爱是不能比的			走
女人什么时候开始享受			性 走
致被强暴的女人			走
母亲无节			走
每一天都去播种			走
路远不胜金			走
握紧你的右手	中国青年报92.3.16		毕
打开你的坤包	北京晚报94.3.24		毕
女士，你多大年纪？			性 走
午夜的声音			
深圳女“牙人”	（『性别按钮』では「特区女牙人」と改題）		性

所收作品	揭載誌	轉載誌	備考
第六辑			
“预计今天晚上到明天……”	北京晚报91.3.25		毕
三月，是我们的节日			
黑裙子·窄领带			
待到正月上元节			
从“武”到“术”			
瀑布灯	北京日报92.10.12		毕
崇文门三角洲的马莲			
B门			
瑶台镜			走
写“福”字的女孩			
博士的秘密			走
假如我能活下去……			
为了能够紧紧地握住一双手			走
每天9点50			
积木别墅墙上总得挂点什么			
久病成灰			走
嘘，梦不可说			性
依然写情书的女孩			
胸前总得印什么			
挤公共的汽车			性
请把烤乳猪打包	北京晚报95.1.1		毕 性 走
为白海鸥签名			
阅读是一种孤独			
看别人的报纸			性
择书秘诀			性
喜欢文学，比较地不容易犯罪			性 走
书的彩翼和电视的跛足			
丘吉尔教我绘画			走
熟瓜子和原水爆			
书的扉页里，树在哭泣			走
背窗而立			走

所取作品	掲載誌	転載誌	備考
猜猜礼物			走
弱智的上帝			走
不开心的开心果			走
第七辑			
第100号蛇酒罐			
在海参威闭眼睛			走
沙漠公园			
山丹“珍宝馆”			
陇西行			
如果你没有看到过钻塔			
脱口秀			走
干杯，蛤蚧酒！			
偷一颗圣诞水晶球			
当我们离开北京的时候			
轻松山房			走
客串一把希望			
晶晶闪烁烁			
谁知盘中餐			
玛瑙人	青年文学93-8		
在阿穆尔湾请愿			
与教授远行			性 走
第八辑			
孩子，我为什么打你	北京日报93.1.4		性 走
在儿子考试成绩不好的时候			
“我羡慕你”			
下午去开家长会			
教你生病	南方周末94.4.29		毕 性 走
孩子，请闭眼			
进当铺的男孩			
儿子的创意			性 走
儿子方程式			性 走
混入北图	天津日报93.7.15		毕

所收作品	揭載誌	転載誌	備考
妈妈的饺子			
带白蘑菇回家	南方周末94.8.5		毕
额头与额头相贴			
妈妈的水仙			性
抱着你，我走过安西			性
第九辑			
试写儿童散文			
适度撒谎			
被老师读作文的时候			
牛皮筋，猴皮筋			
看着别人的眼睛			
推开小蓝门			
鞋带儿			
怕见老师			
高高的白杨树			
第十辑			
提醒幸福	北京晚报94.3.13		毕 走
珍惜愤怒	北京日报93.11.1		毕 走
逃避苦难			
性别按钮	大家95-2		性
谈“怕”	北京晚报94.3.15		毕
人生如带			走
谎言三叶草	单身世界创刊号		毕 走
钱的极点			走
翻译时间			走
凝视崇高			
伊索的纠正			
我注视我自己的头颅	小说林93-2		毕

◆单行本リスト

- 1 『女人之约』 青年文学丛书 中国青年出版社 1994.7
- 2 『生生不已』 红罂粟丛书 河北教育出版社 1995.3
跋
- 3 『毕淑敏作品精选』 中国三峡出版社 1995.5
作家——医生毕淑敏 王蒙
代自序 从西部归来
雪线上的蛋花汤 (掲載誌 八小时以外94-5)
- 4 『白杨木鼻子 毕淑敏短篇小说集』 紫丁香丛书 中国对外翻译出版公司 199 5.8
自序
与教授同行
- 5 『预约死亡』她们文学丛书小说卷 云南人民出版社 1996.3
她们——《她们文学丛书》序 程志方
- 6 『性别按钮』她们文学丛书散文卷 云南人民出版社 1996.3
她们——《她们文学丛书》序 程志方
女人，谁为你呼唤
缠绕论文的思念
断臂的姐姐
友情如鞭
流露你的真表情
保持惊奇
我很重要
也许在街上相逢
没有墙壁的工作间
第一千次馈赠
是否永不去三峡
罂粟为什么开红花
她们用笔对我们说
你使那片绿叶永恒

7『走出白衣』当代名家随笔丛书

群众出版社

1996. 1

序

清醒的女孩——为张晴散文集作序

尴尬处方

准备进当铺的男孩

编者的话

◆单行本未收作品

源头朗

屋脊上的女孩

揭載誌

小说界96-3

十月96-5

転載誌

小说月报96-8

小说月报97-1